

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

艦隊これくしょん ～深い冷たい海の物語～

【作者名】

かみい〜

【あらすじ】

大本営からの特別海域へ進出命令。

秘書艦である私はその電文を提督へ渡す。

「鎮守府の全勢力を持ってこれを撃滅せんとす。」

そう言い放った提督

奮戦する第一艦隊

道中でこの作戦の勝敗にかかわる選択に提督は決心する。

「進撃」

それを聞いた第一艦隊の「艦娘」達は、全力を持って
海域の最終局面に突入していった。

第一話 慢心

第一話

慢心

「赤城さん…あなたが無事ならいいの…先に逝って…待ってるわね……」

こうして、私は深く冷たく…驚くほど静かな海に一人、沈んで行つた…

特別海域に進撃も残りわずかで、後一步で攻略できるところまで来た私たち艦隊は、突然の奇襲に襲われていた。

「赤城さん！大丈夫!？」

敵の航空機の爆撃を回避運動を取りつつ、一航戦で、私のペアであり親友の赤城さんの心配をする。

「ええ、私はなんとか…加賀は平気?」

「ええ…大丈夫だわ。ここから反撃と行きましょう!」

飛行甲板のエレベーターが作動し換装が完了した艦載機たちを次々と発艦する。

私たち第一艦隊には金剛、比叡、時雨、夕立で編成され機動性にも索敵にも万全…だった…

「shit!赤城!加賀!そっちに敵艦爆が向ったネー!!」

金剛の何時にもない真剣な顔が見える。

「大丈夫、みんな優秀な子達ですから。」

そう言って回避運動も取りつつ艦載機を繰り出す。

何時にももなく私は落ち着いていた。艦載機の子達も調子がいいみたいで帰還率が高い、今日は最後まで行ける…そして…提督の元にいつも通り戦果を持って帰れる…

「加賀！直上敵艦爆4！急いで回避を！危ない！」

赤城さんの声が私を我に返る。しまった。気を一瞬抜いていたスキに…

この距離では回避は間に合いそうもない…
そして敵の爆弾が投射され…4発のうち2発が飛行甲板に直撃、2発は運良くそれ、海中に落ちた。

「飛行甲板に直撃…そんな…」

その艦爆隊を最後にするように敵は引き返して行った…まんまと一撃離脱されてしまった…

「加賀！消化は?!急いで…」

涙目になりつつ心配してくる赤城さん、周りの金剛達も近づいてくる

「ありがとう、もう大丈夫だわ。

火の手も収まったし…しかし…

大破してしまって…その…申し訳ない…」

時雨と夕立が目を合わせるよ、

「大丈夫ですよ！加賀さん！誰でもあるんですよ！」

「そうですね！ 私たちも始めの頃はそうやって提督に迷惑かけてたっ
ぽいー」

「そうですね。ありがとうございます」

そう話しているうちに金剛が隅で怒鳴っていた

「なにいつてるんですか！ 提督！ 大破してるんですよ！ いつもより調
子がいいから当たらないだろうって……これが最後……時間がない……
うう……命令……デスカ……」

わかりました……第一艦隊……「進撃」します……」

重苦しい雰囲気無線を閉じる金剛、そうか……今の話は進撃するか
しまいかの通信だったのね。

「ふうー……第一艦隊は進撃することになった……ネ……大破進撃は非常に
危険……でも大丈夫！ 私たちが全力で加賀を守るネー!!」

「そうですね！ お姉様！ 私たちで加賀さんを守りながら戦うのです！
気合入れていきますー！」

「魚雷で敵艦も一発さ！ 僕に任せて！」

「私もしっかり頑張るっばい!？」

「加賀……私が着いているわ……だから安心して、あなたが今できる事を
精一杯するだけでいいわ。無理だけはしないで……」

「ありがとう……私は私が今できる事を精一杯やってみみんなをサポート
するわ……」

こうして私たち艦隊は大破1小破2の状態で最終海域に「進撃」するのだった。

飛行場姫が立ちほだかる最深部。

「進撃」した私達は航空戦に入っていた…

「加賀…あなたは艦載機を発艦できないから回避にだけ気を向けて！なるべく私たちが引き寄せるから！」

赤木さんはいつも私のことを気にしてくれる。鎮守府に帰ったらいつも私が世話というか、近くにいてあげないと、守ってあげないと何かしでかしそうで…でもそんな毎日が私は望んでいたのかもしれない…これからもずっと。

周りを見渡すと激戦で、砲雷撃戦に突入していた。私もこの最終局面で戦いに参加できなくて悔しい。

敵の戦闘機や砲弾が入り乱れるなか私を除く5人の艦娘達は奮闘していた。

金剛は41cm砲を見事に敵艦隊に当て、赤城さんの艦載機達は見事に爆撃を成功させ、駆逐艦二人は見事に敵砲弾をかわし自慢の速力と身軽な足で華麗に舞い徐々にダメージを与えて行った。

しかし私は何かを感じた…何かがない…

戦闘はもつれ込み夜戦モードになりつつあった。太陽がもう少しで沈み、海面はオレンジで綺麗に染まっていた。索敵を怠らずしっかり警戒しつつ単縦陣取り進む。

この陣形も提督の指示だった…

ああ…提督は今何をしているだろうか…きっと私がないから執務を貯めているんだろう…私がいなければ彼の方はサボるから…

「これは… 三時の報告… 魚雷推進音探知！ 数4本！ 距離200」

「目視！ 放射状に広がりつつ接近！」

「こんな時に敵潜水艦からの魚雷

昼戦終幕魚雷… 潜水艦…

そう、さつき感じたのは潜水艦…

なぜもつと早く潜水艦がいなかったことに気づかなかったのだろう。 可能性的には十分あり得る話だったはず… とにかく回避運動を。

「急いで取り舵とって！」

そう赤城さんが発すると急いで舵を切った…

私以外

舵がきれなかった。

先の回避運動でダメージを負っていた舵にさらに負荷をかけてしまい、いざ急加速しようとした時に壊れたのだろう。

「加賀！ どうしたの！ もしかして推進力に異常が！」

「方向転換不可… 舵が効かない… 私は魚雷を回避できそうにないわ…」

「そんな…！ 今行くわ！ 私の手に捕まって！」

「赤城さん！ 無理です！ 間に合いません！ あなたまで巻き込まれてしまつてよ!!!」

「でも時雨！加賀は？加賀はどうなるの!?助けないと！速力が早いあなたも協力して！」

「夕立!?ダメね！行つては巻き込まれてしまつネ!!!」

「大丈夫！私なら……」

みんなが私のために……

でも夕立の足でも間に合わないでしょう。

「赤城さん！提督のこと……私がいなくてもしつかりできるように私の代わりに……見てあげて……」

「何言つてるの加賀！あなたもう一緒に帰るの！そして一緒に長い長い風呂にはいるの！そして一緒に……一緒に…………」

「またいつか……一緒に……」

「かがあ!!!!いやあ!!!」

回避できない私に魚雷が当たる。

大破状態で当たってしまったてはもう沈むしかない……

赤城さんは……提督は……私がいなくてもしつかり仕事やら何からできるかしら……

でも……赤城さんのご飯は……

私がつた物しか最近は口にしてなかったみたいだから大変かも
しれないわね。

深く…冷たく…オレンジ色に光っていた海面がさっきまでしたにあつたのに今は上にある…

寒い…苦しい…さみしい…色々な感情が伝わる…そっか…私は今沈んでいるんだ。

最後まで手を伸ばしていた夕立は眼に涙をためていたな…

そんな光景を目の当たりにした私は眼が熱いことに気づいた。

だけど涙は海水に紛れて泣いているのかどうかわからない。

オレンジ色に光っていた海面は徐々に遠くなりやがては日が沈んだのか真っ暗になり何も見えなくなった。

眠い…そっか。これが「死ぬ」

ってことなんだろう

力も全く出せず誰かに引っ張られているかのように、だけど沈んでいるのかはもうわからない。

私はこれから。どうなるだろう。

いつか提督と話していた

深海棲艦になつてしまふのだろうか

あの話をしていた時に提督は、私が敵になつたとしても…
敵に……なつたと……して……も……

第二話 海の底

私の名前は…わからない
ただこれだけはわかる。

「空母ヲ級」

いったいどこから私は生まれたのか、何のためにここにいるのか。

……わからない。

私達の定義、それは陸に海にাগり私たちの邪魔をするものは残さず残滅すること。

そんな曖昧な目標しかないことに、不安を持ちながら私は、頭に乗っている艦載機を発艦させる生き物のようなものに餌をやる。

「なかなかかわいい…」

「あらあー？あなたは新人さんの…」

セーラー服のような物を着ている方が私に話しかけてきてくれた。

「あ、はい、ヲ級です。」

「そうそうヲ級ちゃん。私はあなたの所属する隊の隊長…みたいなものね。正式にはまだ決まっていんだけどね。夕級よー、よろしくね」

夕級さんはそう言ってくれた。

そうか、ここにも艦隊みたいな隊はあるんだな…

あれ…艦隊？私は一体何と比べたんだろう…？「ここ」にも「この他にあつたかしら…」
頭に一瞬何か浮かぶがそれがなんなのかはわからない。

後から聞いた話、ここは特別な海域の中心地であつて海の底らしい。

今は出撃準備期間中で、当分の間出撃はないみたい。

一通り施設や場所を教えてもらい「この艦隊を指揮する司令官の元に向かうこととなつた。」

「司令官…いるんだ。それもそうよね。組織として成り立たないものね…」

「ん？何か言つた？」

「い、いえ。なんでもないです夕級さん。」

「そう？ならこの扉を開けた先にいるから、行ってきなさい？」

冷たく重い扉を開ける。

そのさきには、部屋は少し薄暗く少々怖い雰囲気の部屋ではあつたが、そんな部屋の雰囲気を、壊すかのように陽気な「司令官」
が座つていた。

「やあー待つてたよ。ヲ級ちゃあーん…聞いてた通り君は可愛いねー！」

「……………本日付で配属になりました」ヲ級「です。どつぞよろしくお願ひします。」

「じむじむ。よろしくー！いやーそれにしても夕級ちゃんにも勝るその可愛さ…秘書艦に仕上がったちゃー！」

あれ…この風景何処かで…いや…見たことないな…しかもこの司令…

「地味に近づいて身体触るのやめてもらえませんか…」

「おおーっとごめんね！夕級ちゃん！入っておいで」

重いドアが空くと私を待っていたのだらう夕級さんが入ってきた

「なあーに？司令？今日こそは私に指輪くれることにしてくれたの！？」

「お前はまだレベルが足りてないじゃないか！…（好感度はあるし準備満タンだとしても…ボン）」

「なにかいったかなあ？」

「い、いやなんでもないー！そう

夕級ちゃん呼んだのは他でもなくて…ヲ級ちゃんを「獄門湯」に案内してあげて欲しいんだ」

「あーお風呂ですかあ？わかりましたー！行ってきまあーす」

「え、え？獄門湯って？お風呂って？」

そんなこんなで私と夕級さんはお風呂に…もとい「獄門湯」に行くことになった。

またここも今ままで見てきた施設にない、雰囲気でなんだか落ち着くような、安らぐような感じがする場所だ。

艀装を脱ぎタオルを巻き

いざ入ろうと思った矢先…夕級さんが。

「ヲ級ちゃんの胸！形いいわね！

ちょっと触らせてー！」

「え!?あ、あの夕級さん!?そのそれは…ひゃあん／／／」

「むむ!?この張りど形お主…やるのお…」

「な、何言ってるんですか！やめてくださいっ！」

「冗談だつてば！ほら身体洗って早くはいつてしまひましょ！」

身体を洗い湯船に浸かると疲れがスーと抜けて行くようにで

「ふううー…」

すごく…気持ちいい…体の奥底から何かが抜けるように。

「気持ちいいですね…あつたかくて。」

「そうねえー…疲れをとるにはやっぱりお風呂じゃないと。」

「眠ってしまいそうです…ふぁー…」

「……………ねえヲ級…?」

「ん?なんですか?」

「私時々思うんだ…こつこついう風に誰かと入るのは初めてじゃないよう

な…前にもこんな風に一緒に入ることってあったような…」

おもむろに真剣な顔になって話し始めた夕級さんは何処か遠く見
つめながらそういった。

「私はあなたがここに来る前は一人だったから、厳密に言うと司令が
いたんだけど…初めて自分以外の子とお風呂に入ったんだけど

不思議で、こつこつというのは初めてじゃない気がするの…あなたは私と
お風呂に入ってどう思う？」

「私…ですか…私はよくわかりませんね…私も気がついたらこの姿
で言葉も話せてここにいて…でも、もしかしたら夕級さんの言う通り
ここで生活して行ったらもしかしたら同じようなこと思つかもしれ
ません。」

他人事ではない…もしかしたら私も…なぜここにきたのかわか
る日が来るかもしれない…その時は夕級さんと…

「とじろですか？夕級？」

「なんですか？」

「もっかい胸揉ませて？」

「遠慮します…！」

夕級さんの案内で自室にきた私はベッドの上で突っ伏していた。

「今日はもう疲れた。」

体も温まり夕級さんとも仲良くなれたような気はするし、一日移動してたからつかれた…」

長い長い一日が終わった。

こんなところでやっていけるのだろうか。夕級さんを見てると案外やっていけれそうな気もしないでもない。

そんなことを思いながら私の意識は遠のき、眠りについてしまった。

…

…

…

なに…この風景…
私が誰かと食事を…

…

これは？書類をまとめる私？

…

次は、戦闘？私まだ一度も戦ったことないのになぜ？

…

冷たい…寒い…暗い…苦しい…

この感覚…まえ…にも…

「っは!!」

よくわからない、けれども一度経験したことのあるような…夢

寝汗がひどい、これは着替えなくては…

「一体あの…夢は…」

「ヲ級ちゃぁーん!!!」

私の名前を大きな声で呼びながら、勢い良くドアを開けて中に入ってくる……司令が。

「昨日はよく眠れ…た…かい?…」

ちよつと着替え途中の私に出くわした司令は、入ってきた勢いをだんだん失くし額に冷や汗と思われる汗が流れてきた。

「お、おお、おはよう…ヲ級さん…、今日は朝ごはん食べたら…会議があるから、しゅ、出席するよつと…」

「他に何か言いたいことはありますか?…」

私はこの上ない、虫けらを見るような目でそう言った。

「い、い、いい形の…胸だね…」

「出てってください!!!」

パアーン！

「全く…ノックもせずに入ってきて来るなんて…あの司令は…」

司令の額を打った右手が少し赤い。

「まあまあーヲ級ちゃん、司令もヲ級ちゃんに気を使ってると思うから許してやってよ。」

ヲ級さんはやれやれと言った感じで話してくる。

食事を終えた私たち二人は司令室に入った。

「ヲ級以下一名、入ります。」

「ヲ級以下一名、司令官の呼び出しに応じ参りました。」

「おおー、待っていたよ。」

毎度部屋の雰囲気は全く合わない司令の陽気さ…。
朝あんなことがあったのにもうケロっとしている。

「その…ヲ級ちゃん…そんな粗末な物を見るような目で見ないでくれるかな…」

「いいえ。ご心配なく、司令を見る時の標準です。」

「それは困ったな…あはは…（新たな道に目覚めちゃうじゃないか…）」

「何か言いましたか？」

「い、いや、全然何も言っていない！全然！」

一息ついた司令は

「では、君たちを呼んだのは他でもなく、そろそろ訓練を始めてもらおうかと思ってね。」

手を組み、その上に顎を乗せながらそう言った。

「訓練？まだ艦隊を組めるほどの人数はいないんだけどお？」

「そこらは心配しなくていい。これから、【増えてくる】と思うから増えてくる？どついつことなんだろうかと、思っていると司令は、封筒を机の引き出しから取り出し、中身の紙を私たちに見せた。

宛：各鎮守府の提督

差：大本営海軍作戦司令部

資源が少ない我が海軍はこれより新海域への進撃を開始する。
この地を占領する事により、新しい資源、人材を確保することにより、これからの進軍に、役立てることを目的とする。
各鎮守府、邁進せよ。

「この電報は敵の電波を傍受したものだ」

封筒に手紙をしまいながら司令は言った。

「新海域とは、どこなのですか？まさか私たちがいるところでは…」

司令は首を振りながら応える

「いいや違うよ。ここではない、だがしかし敵もそろそろ大きく戦況を広めようとしているのは確かだ。なので私たちはこれから訓練するんだ。」

真面目な顔で話す司令はキリツとしていた。

「これより、夕級、ヲ級を主とした海洋訓練を行う。各人、来るべき戦いに備え技量をあげ、大戦果を得れるよう期待する。」

ビシツと敬礼をする司令に私たちも答礼し部屋を後にした。

これから、私たちの力が発揮される。

この頭についているこの子もしっかり扱えるようにならないと…

夕級さんとがんばって行こう…

「ヲ級ちゃん。一緒に頑張ろうね！」

夕級さんはそう微笑みかけてくる。

「ええ、頑張っていきましょう。」

それは、新たな道であり、進むには少し険しい道であるのは確かだった…

第三話 海

第三話

海

こんな光は始めて…なのに始めてではないような気がするの、なぜだろう。

太陽光が眩しく、私の白い肌に突き刺さり、そして暖かい。

「温かい光…これほどまでに光が温かいとは…底では考えられないな…」

そんな日差しの中、先日の訓練開始の命令が降りたので、私たちは海上に出て訓練開始していた。

陣形から戦闘、航空戦、砲雷撃戦、雷撃、などなど順調にこなしていた。

夕級さんの主砲は火力が強くの毎回粉々にしていた。

「しれいいー！見ててくれましたかあ？粉々ですよ？粉・々！」

満面の笑みで司令に報告し、褒めてもらおうとする夕級さん。

「ああ…すごいぞ夕級！粉々だ！よしよしうまくできたな！」

「ふふふ…ありがとう…」

撫でてもらいすごく嬉しそう…

そついつ私は司令の手を眺めていた。

「あの手に撫でてもらえたら…私は…」

何を考えているのだろうか私は。

頭を横に大きく振り訓練に集中する。

頭の「それ」から出る艦載機達はあまり練度が足りていないという
か、

連帯がなつてなかった。

「どうしたら…」

「そうだな…ヲ級…」

おもむろに唐突に割入ってくる司令

「またいきなり入ってきましたね司令。少しドキッとしたじゃないですか。」

「え!?それは私のことがすきr y…」

「そんなことあるわけじゃないじゃないですか。」

「またそんな目をしながら私を見て…」

ゾクゾクしているように見える司令に呆れつつ相談してみる。

「司令…艦載機たちの連帯というか…練度というか…足りない気がしてるんです。」

「練度は始めたばかりだから仕方が無いとして、連帯か…」こにき

て結構日は経つが…それは困ったな…」

司令も考えるように顎に手を当てている。
そんな司令の手を私はまた見つめていた。

「あの…ヲ級さん…？そんなに見つめられたら、僕後に引き下がれなく…」

「あ…いえ…なんでもないです。」

私はすぐそっぽを向いてしまった…夕級さんのことが羨ましいの
だろうか…撫でてもらう…とき…なくなつて…

「ん？どうしちゃったのかなヲ級ちゃん…」

「本日の訓練終了。海底基地に帰投する」

司令の一言で全員が訓練を終了し帰投した。

「ヲ級ちゃん、疲れたわねえ…」

腕をだらんとしてだらだら歩いている夕級さんがいた。

「ええ、少しばかりハードでしたね。」

「こんな時はあれよ！あれ！」

「そうですね。行きましょつか。」

艀装を脱ぎ、少しばかり赤くなった肌を露わにし二人は…

「ふわぁー…気持ちいい…」

獄門湯、もといお風呂に来た。

「一日の疲れを取るのに、すくいいですね。お風呂といっのは。」

芯から温まり、肌が少し赤いところは少々しみるが、だんだんなくなっゆく。

そんな中扉がガラガラと開いた。

「あらこんな時間に珍しい、誰かしら。」

夕級さんが確かめに行くところには…

「フフフ…私の魚雷と魔の力で敵艦などたやすく沈められる…そんな私は最強…ふふふ…ハハハハハハ!!」

何やら痛々しい言葉を発しながら入ってきた。

「えーっとあなたは…」

「ふふふ…私が説明しよう!!」

その子の隣にいたのは堂々とタオルを下半身に巻いて入浴する気満々の「司令」がいた。

「この子は重雷装巡洋艦【千級】ちゃんだ！みんな仲良くするよつに…
HHHHHHH…」

「司令により魔のそこから這い上がってきた手級だ。私の魚雷と魔の力は最強にして絶対…」

もう言葉からして中二病全開な彼女は手級。

なぜかこの子は他の手級とは違うらしく足がついている
他の手級は足はなく元々鉄の塊が着いている…らしい。

彼女は足がある代わりにその鉄の塊は乗り物のようになっている
らしい

「ふふふ…噂にも聞いているぞ…機関のエンジニアント達よ…空母ヲ級に戦艦ヲ級…そして司令

せいぜい私の足を引っ張らないようにな…ははっはっは…」

「ま、こんな調子だがみんな仲良くやってくれ。では！お風呂に入る
としようか！みんなで一緒に…」

どさくさに紛れて湯に浸かろうとしてくる司令に私は…艦爆を発艦させた…すなわち爆撃だ。

「あーわわわ、ヲ級さんちょっと！お風呂で爆撃はまずい！シャレにならない！」

「そんなこと言っても許しませんから司令。」

「あらー…私は別に構わないけどお？」

夕級さんは余裕の表情でそんな言葉を口走っていた。

「いいえ！構わなくありません！こっちはお仕置きです！」

「私も戦友とは一緒に汗を洗い流したいが…」

チ級が言葉を言い終わる前に私はギロリと睨みつけた。

「う、うう…そ、そうだな！これはダメだな！（ひゃあー…ヲ級こわ…）」

そんなこんなで新しく加わったチ級、司令は毎回こんなことをしてかしているが今はこれはこれで楽しい…のかもしれない。

訓練もその後の入浴も…

訓練もだいたい数をこなしてきたがあまり艦載機たちの調子は変わっていない…

どうしたものだろうか。

何が悪いのか、何が原因なのか、わからないままだった。

訓練期間も作戦終了間近になりつつあった。

周りのレベルはなかなか高くなっていると思われ、私も個々の能力は高くなったと思う。しかしやはり連帯が…あまりうまくいかない

飛行陣形などなど、私はどうしたらいいのだろうか…

「その使い魔を放つ者よ、なにを深く考えているのか？」

チ級がまたよくわからない言葉で話しかけてきた。

「チ級さん…正直なにを言っているのかはさっぱりだけど、心配いらないわ。これしきすぐ解決してみるわ」

誰かに助けて欲しい、どうしたらいいかわからない、でもこんなこと聞くのも私のプライドが傷つく…

「そ、そうなのか…おっと…闇のものとの交信時間。だいかなくては…」

千級さんはまたわけのわからないことを言いながら去って行った。

本日の訓練も終わり一日を締める入浴時間になった。

今日もいつも通りに終わり

一日が過ぎようとしていた、しかし…

「たのもー…!!」

元気良く入浴場に入ってきたのはなんと司令だった。

「し、司令い…なにやってるの!? 堂々と…」

夕級さんはそう言いながらまえを隠している。

「司令…この前に懲りずまた来たのですか…これはもうあれですね…
発艦始め…」

そう言いながら艦載機を発艦準備し司令に目標を置いた。

しかし、いつもならこのくらいで司令は必ず引くのだが今日はなぜか強気な顔でこっちを見ている。

私はそんな司令が許せず発艦し出した。

司令一直線に艦爆は向かい綺麗な飛行陣形を取り爆撃に成功した。

「綺麗な陣形そして目標に対する

正確な爆撃。これこそ君が探していたものではないかな…ちとばかりこの攻撃は効いたよ…」

司令は…体を張って私になし得なかったものを教えてくれた。

でもなぜ何時にもなくこんな綺麗に飛ばせたのだろうか。

「ヲ級。お前にはしっかりと目標を見定めることをしなかったからだ。

闇雲に前方にいる敵に対し全体に艦載機を向かわせても意味がないだろう？それに艦載機たちも目標がはっきりしないのであたふたもするわ。」

「なるほど…そういつごとだったんですか…ですが…司令は体を張りすぎです…これくらい口で伝えてもよろしかったのでは…？」

「なにを言っただい!?私はいくまでもみんなのその豊富なボディ！を見たかっただけSA！」

……やはりこの司令はダメだ…

その後数回訓練を行った、私の思い通りに動かせるようになったと言うか、明確な目標を立てることでした。しっかりした、陣形などを取れるようになった私達は調子は順調になった…司令のおかげで。

私は思う

司令のあの手…あの手に頭を撫でられたら…私は…

最近そのように思ってしまうのはなぜだろう…

夕級さんがされてるのを見てから…

いつか…いつか私も撫でてもらえることができるだろうか…